2.NSDにふさわしい学習空間に対する理解及び検討

藩校や寺子屋にあった学び

明治期の学校創設時と同様に、今回の学校再編にあっても、地域と学校の関係は最も大切にされるべき事項で、地域のありようがこどもそのものであり、学校そのものと言ってよい。新しい時代はこどもたちだけに訪れるのではなく、地域の大人がどのように考え何をこどもたちに残していくのか、私たち大人が大きく問われているプロジェクトである。いうまでもなく地域とは人の歴史ばかりでなく、そこにある豊かで多様な自然環境を含めた「いとなみ」そのものである。伊那新校では、これまでの校舎の在り方に囚われず、自由で自然な地域の「いとなみ」そのものを受け入れる学校として地域の歴史の上に構築していきたい。

振り返ってみれば、今回のNSD における共学共創の理念は「北の松代、南の高遠」の時代、藩校や寺子屋で行われていた地域の学びそのもので、実践学と言われた学びは探究などの PBL そのものと行って良い。現代においてはその学びの核に加え、ICT の技術や未来の学びの技術を利用してより広範囲の繋がりや、深度のある専門的な情報、上質な情報を活用する技術を日常の学びに取り入れていくことが出来る。一方で、いくら ICT の技術が発展しても、こども達の日常と学びの空間のありようとは不可分で、建築のもつ力は、建物がある限り継続的に影響を与えていく。私たち大人が描く、未来へのまなざしを市民との対話を通し、精錬し、建物の寿命を全うするまで、柔軟に使い続けられる校舎を、未来に対する環境と、教育空間、全てにおいて矛盾なく伊那新校に収束させていきたい。

●学習空間の例

教員の空間と専科コモン

教員には専科のコモンに教科単位の「教員ラボ」と管理諸室付近に「教員コモン」を用意。教員コモンは教科を超えて先生同士コミニケーションしたり、自身の活動をプレゼン、先生同プロジェクトコーナーなどができる場所。教員も個人としての個性を活かしてコミニケーションが好きな先生、一つのことを追求している先生、そんな先生たちの活動が学校の中に散らばっており、生徒は自分にあった先生をいつでも頼れる構成。

オープンなコモンスペース（自治のスペース）

校内にはメインコモン、教員コモン、専科コモン、学年コモンと 4 つのコモンスペースを設け、ALS をより自治的に捉えたオープンスペース。従来であればランチルーム、メディアスペース、グループ学習、会議室などと言われてきた場所を集約分散している。コモンスペースでは生徒、教員が使いたいように使える工夫をこらし家具やスペースなど WS を通じて整備したい。

誰もが多様性を認め合える空間

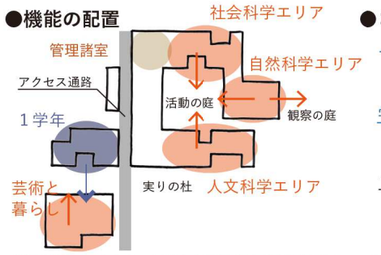
校内には室内室外共に個人で使えるスペースから少人数、グループ、クラス、学年それぞれの単位にあった多様な場所を用意する。平屋の特徴を活かした外部空間との繋がり方、明るさ、湿度、音響、風、地面、床、高さ、広さなどのあらゆる環境を学びに取り入れられる。「一人一人を主語」とした全ての人が自分にあった場所で過ごせる高校とする。

●新たな学びを加速するゾーニング

伊那新校は地域における進学校として位置付けられ、履修内容からも学習負荷の高い学校であることが読み取れる。その中で、こども達がより専門性の高い学習空間と自由度の高い生活空間とを両立、より充実させるにはどのような形式が適切か検討した。

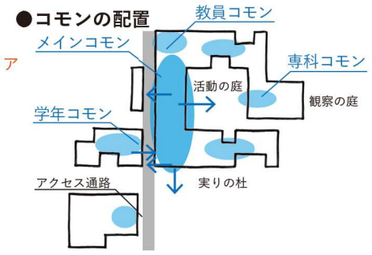
「1 学年」は選択制の単位がないことから、中学からの流れを引き継ぎ、高校に慣れることを目的に、主に学年単位でのグループを形成し、新校の自由さと自主性を学び取るための位置付けである。2、3 学年は生活空間である自治的な「コモンスペース」を中心に、専門の教科ごとに教室を移動し、専門エリア「社会科学エリア」「自然科学エリア」「人文科学エリア」に分かれ、自らが選択した学習を行う。専門ごとにグルーピングすることで、教員は各専科のラボを持ち、自分たちの分野の研究、教育方法を深め、生徒とのより深い学びに反映する。「専科コモンスペース」には専科に適した家具や書籍、掲示、新技術に対応した空間などを設えることで、専門分野への興味や関心を深める機会を多数用意する。また、それぞれは回遊でき、外部、半外部空間と連続するため、様々な場面で自由に外と内とを行き来しながら学ぶことができる。

●機能の配置



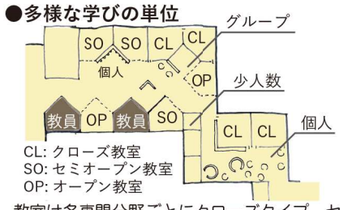
選択単位の少ない 1 学年は特別教室は共用の独立形式、選択単位の多い 2,3 学年は授業ごとに専門分野の教室に移動し専門性に特化した学びと興味との出会いを。

●コモンの配置



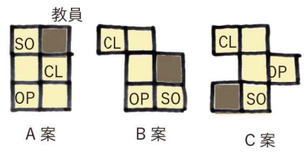
メインのコモンスペースの他に学校のさまざまな場所にコモンスペースを配置して、誰もが自分の居場所、やすらぎを見つけられる仕掛けに。

●多様な学びの単位



教室は各専門分野ごとにクローズタイプ、セミオープンタイプ、オープンタイプを用意して。履修人数や授業に合わせて選択できる。

●学びに合わせて変化できる提案

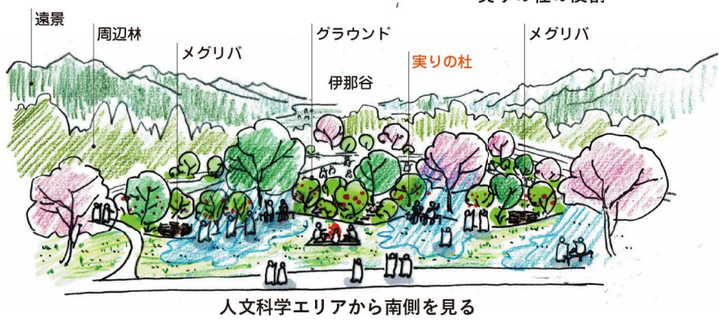


今後の具体的な学びの在り方の打ち合わせの内容、新校舎を建てられる範囲の変更に合わせて、プランを自由に変化できる。

アメーバーのような平面計画

平屋で自由な平面はこれから具体化される新校のカリキュラムや学校運営の方針必要教室数などに合わせ、自由に計画を伸縮出来るだけでなく、新しい学びに適した豊かな機能との関係を結びやすく、未だ想定しきれない未来への多様な利用に対応しやすい。

実りの杜の役割



人文科学エリアから南側を見る

●環境とのカンケイを創っていく循環の庭

学校は人を育てていく場であるため、その庭も自ら創り、共に育っていく場とする事で、「環境とのつながりを感じ学べる」新しい学校の庭の在り方をデザインします。先生方や生徒と共に苗木を植栽し、杜や果樹を育て、管理はランドスケープ専門家監修によるエコロジカル管理を実施し、出来るだけ廃棄物を出さず、循環し無理なく管理できる環境を設計します。樹木は伸び伸びと枝葉を伸ばせるよう配置し、やがて大きくなり手が届かなくなったら萌芽更新により再生させ、かつての里山管理と似た手法を取ります。伊那谷の自然植生をモデルとした設計とし、生徒が日々伊那谷らしさを感じ取ることが出来る庭を共に育てていきます。

●主体性を育む生徒自治のコモンエリア

コモンエリアには機能としては保健、相談、放送、生徒会、進路、図書、司書、会議などを配置。生徒の生活やくつろぎ、探求など個人やグループで取り組む学習で利用する場所をそれぞれ占有して使うことができる。コモンエリアは生徒自治による運営を提案したい。ロッカーや下足入れなどもコモンエリアを中心に設定し、自主的な活動のために資料や成果を広げている学生の様子に聞き耳を立てながらランチができたり、昼寝ができたり、自由な時間を過ごせる場所としてイメージしている。

●個別最適な学びを実装する専門エリア

専門エリアは、社会科学、自然科学、人文科学エリアに別れ、講義室や実験室、専門教室のほか、共用部には新しい学びのための機能としてファブリケーションラボ、編集スタジオ、パフォーマンスコーナーなどが考えられ、オープンな教員スペースや専門書や研究成果の発表展示プレゼン、グループ学習など子供達が深く専門性を追求し表現できる仕掛けが考えられる。また、それぞれのエリアを跨いで移動することで、他分野に触れる機会も多く用意できる。